

## ～ ホワイトセイル慰靈行を終えて ～

1981年9月、「一橋大隊消息不明」の報を誰から聞いたのか今は思い出せない。

瀬戸内の製鉄所勤務3年目では搜索に行きたくとも赦されず、忸怩たる想いの中、第一次搜索隊からの「全員絶望」報告を聞いた。あれから40年近くが経過した。

平凡なサラリーマンでは長期休暇もままならず、定年後には必ず彼らが眠るホワイトセイル峰眺めに行こうと同期の神野に声掛けしていたが、その話が針葉樹会の会員間に広がり、現地経験のある前神さんが参加することでミッションが定まったのが2018年秋。マナリでロッジ経営に従事するサンペル・甘利夫妻を通じてトレッキング手配が完了した時点で今回の旅の成功がほぼ約束されていたようなもの。あとは現地の天候のみが懸念されたが、これもバタル以降のトレッキング中は奇跡的な晴天に恵まれ、無事、追悼の目的を果たすことが出来た。ただ、地球温暖化の影響で氷河の縮小は著しく、予定していたA B Cまで到達出来ず、ドローンによる遺品搜索も不発に終わったのは残念だったが、これも彼ら三君の意思なのかも知れない。DP地点から仰ぎ見たホワイトセイル峰の稜線は鋭く蒼空を切り裂いていた。40年前の自分なら登攀意欲を掻き立てられたのだろうか、自信も無く分からぬ。

しかし今は、眺めるだけで満足出来る山の存在を認める自分を登山家ではないと責めることもしない。いつの時代も挑戦者は必要だ。途半ばで倒れたとしても、そのバトンを継ぐ者がいれば良い。私たちはどんなバトンを渡していくのだろうか。

文責 佐藤周一（1979年卒）